

# 書評：『人生に期待するな』（北野武著、扶桑社、2024年）

田中 恭平

## 第一節：この本と私との出会いについて

あれは9月のことであった。高校時代から、私とその縦横無尽の活躍に圧倒されるしかなかった、さる高名な人物が、ネット上の誹謗中傷や有力者たちの政治的思惑にひどく翻弄され、自殺した。生前、かの女は時めいていたのである。この社会の周縁に常に身を置いてきたし、しかも全然そこから出る気がない私のような人間から見たら、このかたは、高校の同期の中で1番、輝いてみえていた。私はかの女の死のことを聞き、高校時代、物理学の実験でこのかたとペアになると、このひとにほとんどの作業を代行してもらっていたことを即座に想いだした。私が当時、物理学の授業を聞いていな過ぎて、実験で使いものにならなかったからである。そしてあのときの感謝の念と、反省の念が込み上げた。おそらくかの女は、私のことなど覚えているはずもなかったが、私は覚えていた。

そして、いつも以上にふさぎこみ、その後しばらく安心していただた私だったが、ふと、自分があるドラマを、すぐるように、見ていることに気がついた。『ツイン・ピークス』というドラマである。高校で一番の美少女であるローラさんがある日、なぜか、河原で突然、変死体で見つかる。その原因を村のみんなと考えてみると、だんだん人間の最奥部に眠る、闇と優しさだが、対をなしながら怪奇現象とともに噴き出してくるといふ、錯乱した内容のドラマである。誰が犯人か、なんてことはどうでもよくて、少女の死によって人々の心が根底から揺さぶられ、普段考えることが難しかったことをみんなが直視するようになる。そのことが重要なのである。数話ぶんみていたら、私もだんだんそのドラマの中の登場人物たちと同じように錯乱してきて、本駒込の本屋にふらりと入っていった。今思えば、私は何かしら、人間のくすしき最奥の光と闇とを抉り出すような言葉を、求めていたのだと思う。そんなおりに出会ったのがこの本『人生に期待するな』（北野武著、扶桑社、2024年）であった。

私はこの手の本を買うタイプの間では全然ないから、最初は立ち読みだけで全てを読んでしまおうとした。数時間もあれば読めそうな分量しかなかったのだ。この本は2024年に出た本だから、買うと税込で1650円もするのだが、私は、1650円で新品の本を買うことは絶対にないと言い切れる。私は貧乏人なので、中古本しか買わない。さらに、なぜ私が新品本を決して買わないだけにとどまらず、この手の本を一切買わないのかということ、私には、芸能界の伝説的人物の語りを読みこなす能力が欠けていると思われるからである。

著者の北野武氏について、もちろん通りいっぺんのことには知っていた。しかし、私は芸能記者ではないから、有名な「フライデー襲撃事件」についての歴史的評価さえも正当にはできない。この事件の原因も真相も、詳しく知らないからである。また、私は映画が大好きなので近作『アウトレイジ(2010)』も『浅草キッド(2021)』も『首(2023)』も見ているけれども、死と

隣接しながら撮っているかのような、あまりに美しい前半期の映画群、たとえば『ソナチネ(1993)』について正当に評価できるほどの能力が私に本当にあるのかということ、おそらくそれも疑わしい。北野氏の映像は、私ごときが語るには、美し過ぎる。そう思って生きてきた。

しかし、立ち読みして即座に気づいたのは、この本が私のような人間が読んでも、無類に面白いということであった。よく読むと、圧縮された堅実な思索の跡が見えてくるからである。ややもすると「飛躍がある」「不整合がある」「無骨である」などと批判されかねない短文の連続に、私はだんだんハマって行ってしまった。だから私は、この書評を依頼されたとき、私が普段読んでいることが多い映画本でも哲学書でも語学書でもなく、あえてこの不思議な書物を紹介してみることにした。北野氏の、韜晦しているような筆致にときたま当惑を覚えつつ、行間を埋めるように読んでいく読書も、読書の愉悦の一側面を確実に捉えるものであると私は思ったのである。自分なりに整理して読んでいく、余白に自分の体験や反論を書き込み、共感や違和感といった、自らの情緒の揺れを味わう。芸能界の伝説的人物の文章を、自分の普段の思索内容との距離を測りながら、慎重に読んでいく。そういう体験を、私は読書に求めてもいいことが分かった。新鮮だったのである。こうしてこの本を買い、家に帰ってすぐに読み終わった。

この本の中には、かの女の死を受けて私が友達にモゴモゴと呻吟していたような言葉とよく似た言葉が冒頭から書かれていた。まずはそこから紹介しよう。以下、引用は、ひとつを除いて、すべて同書から引用していく。紙幅の都合で改行を省略した箇所があることと、強調のための太字は私によるものであることとを、あらかじめ断っておく。また、【隅付き括弧】の中は私が引用を要約したものである。

引用1.【SNSこそが残酷なのだ】

「ネットのSNSってのは残酷なもんだ。リアルの世界では何もできないような匿名の連中が、鬱々とした気分をSNSで誰かにぶつける。不平不満や嫉妬なんかのネガティブな感情を、たまたま見つけたターゲットに向かって吐き出してるわけだ。」(21頁)

引用2.【SNSというニワトリ小屋に自分から入っていくのは自発的隷従に他ならない】

「芸能人やスポーツ選手なんかも、わざわざ自分が叩かれてるSNSをのぞきにいかなきゃいいのに、そこへ入った途端、もう抜けられなくなって袋だたきにあって、精神的に追い詰められたりする。ああいうのは、ニワトリ同士がクチバシでつつき合ってるニワトリ小屋に自分から入っていくようなもんだ。もうそろそろ、こんな不毛なやりとりをするための薄っぺらいスマホなんかとは手を切る時期にきてるんじゃないか。スマホなんか捨てちまって自由にならないと、みんなどんどんおかしい世界に入り込んでしまう。あんなものに依存しているから、毎月、お布施のようにチャリンチャリンと金をむしり取られ、自分の頭じゃ何も考えられなくなって、しまいには精神が不安定になる。スマホ依存、ネット依存なんてのは、奴隷の手鎖と一緒に、これは自分から好きこんで奴隷になってるようなもんだ。」(23頁)

私は、(芸能人の方とお話をしたことは、なぜか相当量ある部類の人間だと思うので)、私の生が芸能人の方々のそれとは、どれほど異なるのか、もっとはっきりいえば、無縁かを心得ているつもりである。しかし、この本は表紙にも、「全ての悩める現代人に捧げる、たけしによ

る福音書。」と書いてある通り、この世界の仕組みやその中でのヒト一般の生き方を平易な言葉で論じたものでもあるわけだから、私にもその部分については書評が書けるように作られているのではないかと思われた。実際、福音書はイエスの人生について詳しく知らない人にも分かる、ある倫理の深層をえぐり出しているからこそ、日々新たな読者を獲得しているのではないのか。なるほど、この本は、バイク事故やフランス座などにおける個別的経験から題材を取ってはいるが、その分析から普遍的意義を引き出すところにまで思索を練り上げていくことに成功しているのではないかと私には思えた。

引用3.【体験の強度を創作活動に取り入れる】

「オイラ、本物のヤクザが殺されるところを見たことがあったから、映画でもそうしたシーンを取り入れたりした。それは、全く違う世界からの啓示みたいなものじゃなくて、全ては自分の経験からなんだよ。」(152頁)

だから、仮に「引用3」のような言葉を見つけても、それほど読者諸氏とは無縁の話だと思える必要はない。著者は、強烈な具体的体験から出発しつつ、その体験を前提せずとも理解できる構造をそこから取り出していく優れた書き手だからである。以下では、テーマごとに各節を分け、私にとって興味深く思われた箇所を順に評していく。

## 第二節：金儲け主義の浸透がもたらす荒廃について

まず、現代社会の金儲け主義について北野氏が優れた分析をした箇所を取り上げてみよう。少し長いが、以下の引用を読んでみてほしい。

引用4.【ディヴァイド・アンド・ルール】

「世界的に経済格差が広がって、オイラ発展途上国の人の知り合いもたくさんいるけれど、そうした国の中にも税金を懐に入れちゃうような連中がいるよね。そんな世の中で金持ちが考え出したやり方っていうのは、「無限大の思想」なんだよ。どういうことかっていうと、例えば1メートルを半分の50センチ、さらに25センチっていうように、どんどん細分化していけば無限に1メートルを分けられる。同じように、貧乏な人の中にも細かい格差、序列をどんどん設けていけば、その中で貧乏同士がひがみ合い、やっかみ合い、足の引っ張り合いをするだろうってやり方なんだね。貧乏な人の敵意は、本来なら金持ちの人に向かうべきなんだけど、こうした格差や序列の中で貧乏同士が敵視し合うんだ。「自分は、下のヤツよりもちょっとだけ上」っていう意識を植えつけることによって、常に自分より下がいる。そうやって線引きをすればいくらでも貧乏な人たちを細分化していけるし、貧乏同士、いがみ合ってくれるというわけだ。そうやってうまくガス抜きをやっていけば、金持ちに敵意が向かなくなる。こういうのは、大衆をコントロールする一つのやり方なんだな。」(58-59頁)

引用5.【環境問題が解決しないのはその方が儲かる仕組みが整備されているせいだ】

「省エネやリサイクルなんかが大切なことは、頭では十分わかってるはずなのにできないの。どうしてできないのかっていえば、経済のシステムを大量生産大量消費から変えられずに無駄遣いを勧め、環境汚染を垂れ流すほうがコストが安くて利益になるって具合になっているからだ。じゃんじゃん買い物をし、食べ物は残ったら捨て、プラスチックを使い捨てる。こんなふうに地球規模でどんどん消費活動をしてもらわなければ、グローバル企業がもうからないようにできてるんだ。」(53頁)

引用6.【幸福度を金額でしか表現できないと思い込ませるのが資本主義のシステム】

「今の資本主義経済万能の考え方だと、結局はどんだけ金を持ってるかで幸福度を測るしかない。そんなのは一面的な価値観で、幸せなんてのは100人いれば100通りあるんだよ。金持ちが全てを持ってるわけじゃないし、金持ちが持ってないもんを貧乏な人が持っていたりする。」(190頁)

鋭い観察に、既にして唸らされる読者諸氏も多いだろう。私もそのひとりであった。「引用4」において、無限分割可能性は社会階級にも見出され、その心理的効果が鮮やかに記述されている。「引用5」でも、環境問題の帰責は個人の心理にではなく構造にこそ向けられるべきだとの指摘がある。どちらも大変興味深い箇所であるが、あえて私がここで詳しい分析を試みたいのは、「引用6」である。現行資本主義の社会には、ある重大な人間に対する単純化がある、と私は以前から考え続けてきた。その単純化をこの「引用6」は見事に射抜いている。

まず私の立論の前提を明らかにしておく。人間は、快樂ではなく意味を求める不思議な生き物である。意味さえあれば不快さえ欲するのが人間である。「断食」は苦痛であるが、神の教えに適うと意味づけられればやりたくなる人もいるのかもしれない。「切腹」は苦痛であるが、名誉ある行為としてみなされていけばやりたくなる人もいたのかもしれない。タバコは咳を、コーヒーは苦味を肉体にもたすが、憧れの先輩のようになれるならやりたくなるかもし

れない。人間は事実として、そうやって生きている。人間は「快苦の原理」では到底可能にならないはずの事柄を「意味の原理」によって、平然とやってのける。動物ならば大喜びで飛びつくビーフジャーキーが目の前にあっても、その所有権が他人にあると知れば人は遠慮するだろう。京都に行って、美味しそうなぶぶ漬けが目の前に供され、「是非食べてください」と言われても、その意味を考え過ぎる人ならば、家に帰るかもしれない。マリーゴールドを貰って、あいみょんを想起するならいいが、花言葉を想起するなら怖くなるかもしれない。人は、花をもらったときにその意味を考えずにはいられないのである。韓国のボーイズグループRIIZE(=ライズ)のメンバーであるスンハンさんが不祥事を起こした後、大量の葬式用の花が事務所に贈られたそうであるが、贈られた側は、これがどのような意味かを考えないわけにはいかないだろう。このように、何事にも意味を経由してから触れてしまう人間観の提示を私がしたところまでは、これ以上の証明はせずに、前提させてほしい。人間とは、快苦をかなぐり捨てても、意味のほうを気にする特殊な動物なのである。

さて、ここからが、現代社会に見られる、こうした人間に対するある重大な単純化を指摘する段である。北野氏が「引用6」で述べる通り、人間が求めている意味を、現代社会は「換金」というやり方でしか人に認識させまいとしているのだ。これが問題中の問題なのである。どうということだろうか。

たとえば、こういうことが若者の間でささやかれているのを、私は聞いたことがある。「初任給をもらって本当に嬉しかった。なぜなら、収入があるってことは、私が社会から求められているっていう、証拠だから」と。しかしこの発言について、ちょっと考えてみてほしい。この発言、裏を返せば、収入がないと、「証拠(=エビデンス)」がないので、自分には生きる意味がないことになりかねない、そういう構造の中で生きている、ということを行っているようにも受け取りうるのだ。この発言に対して、普通は「初任給、貰えてよかったね」と、人々は口々に言うのだろうが、私には「よかった」と言っているのかどうか正直わからなかった。

大金持ちになれば、自分は世界で求められている有意義な人なのだと分かり、貧乏になれば、自分はこの社会において無意味なのだとわかる。これはたしかに分かりやすいシステムではある。だから、前提としてあらかじめ述べておいたように、意味を求める動物であるところの人間は、このシステムを嬉々として採用してきた。現代において、「意味」が欲しければ「金」を稼げばいいのだ。「世界に求められている」とか「自分には自己効力がある」とか、そんなふうに思いたければ、「金」を稼げばいいのだ。

しかし、ここで立ち止まって考えてみたい。人間にお金は必要である。お金は嬉しい。しかし、人間はそんなに金持ちになりたいのだろうか、と。「人間が本当に欲しいのは意味ではなかったのか？」という問いを私は立てざるを得ない。

たとえば、詩作を例にとって説明してみよう。たしかに、誰にも読ませない詩をひとりで書き続けて、それでも豊かな意味世界を生きれるから大満足だという人はかなり少ないだろう(とはいえ、エミリー・ディキンソンという詩人は、生前ほとんど無名であり、40冊の詩作ノート

は死後に親族に見つかって出版され、そのあとで大詩人として有名になったわけだから、そういう詩人もいるにはいるわけけれども、こういう事例は少数派であることは、やはり動かない)。では、人間は満足するためにその詩を換金したいだろうか、とさらに問うてみて欲しい。

「不要」とは言わないにしても、「必然的」とまでは言えないはずだ。かくいう私も人に贈るための詩を書いたことがあるのだが、同居人に夕食のときに聞いてもらったり、誰かに批評してもらうとかすれば、かなりの満足感を得られた。その体験は、とても有意義であった。あるいは、友達を集めて詩の朗読会をしたら、さらに楽しかっただろう。話を戻そう。私が言いたいのは、「意味が欲しいのはわかるが、そんなにその詩を「換金」したいだろうか？」ということである。何度も言うが、たかだか100年弱の生の中で、人間がひたすら求めているのは「意味」である。意味がちゃんと濃厚な体験を通して感受されるならば、「カネ」という分かりやすい指標が与えられることは、実はそこまで重要ではないのではないか。このように、丁寧に日常を分析してみれば、意味とカネの結びつきが実は必然的ではなく、じつは恣意的であるのにもかかわらず、さも必然的であるかのように偽装するところに、現行資本主義の最大の詐術があると私は指摘する。

さらにもっと踏み込んでみたい。「その詩を換金することで本当に意味づけはより濃厚になるのだろうか」と私は問いたい。たしかに、質が量に転化されることで、より「分かりやすく」はなるだろう。たとえば私の書いた前述の詩が一個10円で売れて、印税が入れば、どれくらい私の詩が社会にとって有意味なのかは多少「分かりやすく」なる。それは認める。しかし、「分かりやすく」はなるけれども、人は前提しておいた通り、意味を求める特殊な動物なのであるから、人はその印税をもらうより、直接その詩について、誰かとコミュニケーションが取りたくなるのではないだろうか、と私は予想する。要するに、人は「カネなんかじゃ満足できない」はずなのである。「カネなんかいらねえよ！」と吐き捨てる詩人さえいるかもしれない。実はあらゆる生産物一般にこの詩作事例と一脈通じるものが、本当はあるのである。よほどのブルシットジョブをやらされているのでなければ、「仕事」はカネでその意味が表示されるよりも前から、その場その場で刻々と現れて、味わわれていくような、コンサマトリーな、そのたびごとの新しい意味に満ちている。というか、だからこそ、やれるのである。つまり、どんな仕事も、結果に至る前の過程が、そこそこの価値を既に持っているはずなのである。北野氏も、結果として得られる収入ではなく過程が既に分泌する価値に注意を喚起する。

引用7.【カネをもらうためにやっていると捉えない働き方もある】

「泳いでいる魚に「お前、偉いな」って褒めるやつはいないってことと言えば、働くってことに関してもオイラの場合は、魚が泳いでいるように何かを作ったりするのであって、別に働いてるわけじゃない。映画を撮ることにしても小説を書くことにしても絵を描くことにしても、単にそれをやってるだけで、それを働くこと、労働としてとらえたことはないんだよね。」(79頁-80頁)

もちろん、「過程において意味さえ与えられれば、結果においてカネは要らないよね」などという逆方向の人間に対する単純化を私はここでするつもりは全くない。私は「やりがい搾取」に繋がる論理を決して肯定はしない。そうではなくて、生活の中に満ち満ちている様々な

意味は、カネでしか表現できないわけではないし、量的に表現した瞬間に、不可逆的に劣化変質してしまうものだというこの一点を、私は確認しているのみである。

あるニュースで、「世界の超富裕層26人、世界人口の半分の総資産と同額の富を独占」という見出しがあった。古いニュースだから、今この数字は「26」ではないだろう。とはいえ、なぜ、こんなにも、富裕層はやたらとカネを欲しがるといえるのだろうか。その答えは、先ほど前提した人間観からすぐに導出できる。富裕層も人であるから意味が欲しいのだが、その意味を確認する方法が、カネをたくさん持つという間接的方法しかなくなっているからである。つまり、富裕層として世間の槍玉に挙げられかねない、この26人の性格がガメツイから、こんなにたくさんの富を彼らが独占しているわけではない、と私は考えている。むしろ、彼らは、現行システムによって、意味を確認する手段が口座の数字を見るという間接的方法以外にはないと確信させられてしまっているだけではないのか。しかし、いくら数字を見ていても直接的にはやっぱり満たされないから、もっともっと質を間接的に表示できるとされるカネの量を増やそうとする。こうしてカネを増やす様々なサブシステムを作り、その運営が滞りなく進んでいるかどうかをチェックする会議で忙しくなる。忙しくなると、尚更、目の前の生活の中に満ち満ちる意味を感受する時間がなくなる。彼らは、足元以外を常に探す、探しているものは常に足元にあるのである。私は現行経済システムの最上層にいる彼ら26人こそ、このシステムの最大の犠牲者であるという見方すら可能だと言っているのである。彼らは足元にある意味の、直接的感受の機会を奪われ、生きる意味を表示することになっている間接的記号を探すよう、迂遠な経路へと常に駆り立てられているのだから。だから彼らは決して止まることがない。意味を探して、休むことなく勤勉(=インダストリアス)に走り続け、システムを回すのである。北野氏もこのシステムに対する警戒を促している。

引用8.【ネットはマッチポンプの金儲けシステム】

「ネットを利用したり、自分たちに都合のいいシステムを作って金儲けしてるような連中はしたたかだ。夢をなくした人に対してフォローしているような上手さもある。これはマッチポンプで稼ぐようなもんで、麻薬の売人が麻薬更生施設を経営してるのと同じなんだよ。だから、どう動いたって金を取られちゃうという仕組みになってる。」(25-26頁)

引用9.【カネをむしりとるシステムに過ぎない「マッチングアプリ」】

「マッチングアプリっていやあ何でも通ると思ってるんだけど、その実態はマルチ商法の引っ掛けサイトだったり、売春斡旋とかパパ活専用サイトだったりするわけで、マッチングアプリと言い換えてるにすぎないわけだ。」(24-25頁)

では、どうすればいいのか。今ここにある足元の濃厚な意味を感受すればいいのである。「引用6」で「金持ちが全てを持ってわけじゃないし、金持ちが持ってないもんを貧乏な人が持ったりする。」と北野氏は注意深く言っていた。そう、富裕層がマネーゲームに心をすり減らされて不満足になるとき、貧困層は今ここにある一杯の水を味わう術を知っており、満足するだろう。目の前に充足があるのに、遠くの記号を追う迂遠なマネーゲームに参加するのは

勿体ない。以下の「引用10」は、カネというより意味を求める特殊な動物である人間の実情を捉えている。

引用10.【カネ儲けのために今ここの意味的充足を犠牲にするのは本末転倒】

「そもそも夢を抱けとか成功しろとか金持ちになれなんて尻を叩く連中が、なんでそんなことを言うのかと考えると、夢を抱いたり金持ちになろうとあがいたりするような人間がたくさんいないと経済が回らないからなんじゃないだろうか。そんな連中のために、大事な今の時間を使うなんてのはバカなことだと思う。だって、どんなに金持ちになって高いワインを飲んだとしても、喉が渴いたときに飲む一杯の冷たい水のほうがうまい。どんな高級レストランの料理でも、母ちゃんが握ってくれたにぎり飯に勝るものはない。贅沢すれば幸せになれるわけじゃない。いくら貧乏でも心構えひとつで人生の大切な喜びはずべて味わえるもんだ。オイラ、演芸場で漫才をやり始めたころ、一日、終わっても金になんねえし、これから売れるかどうかもわからなかったんだけど、とりあえず一生懸命、舞台に立って客にも受けたからいいかって思ってた。」(103頁-104頁)

私はここを読んだ時、先日ある大学のゼミが終わったあと、そのゼミの教授に連れて行ってもらった宴会で、教授が言った「ひとりの師匠、ひとつの本、ひとりの友、それだけで人生は楽しくやっていける」という言葉を直ちに思い出した。『徒然草』の第123段で、卜部兼好は、人生に必要なものは、「食物、衣服、住居、医療」の4つだけであり、この4つ以外を求めるのは「奢り」であるとまで述べている。これは「物的な知足」を説く言説であり、現代でも一定の説得力があるだろう。しかし、北野氏や先ほど引用した教授の言葉は、卜部の言葉とは異なり、「意味的な知足」をも説く言説である。意味的な知足とは、カネによって表示される意味で間接的な満足にだまされる、つまり事実上の不満足に陥るのではなく、目の前の日常からカネに還元される以前の豊かな意味を汲み出すことである。人は物質的に知足するのみならず、意味的にも知足せねば、幸福にはなれまい。私はそのことを、この本から再確認させられた。

### 第三節：機械の限界について

この本で北野氏は、近年その可能性ばかりが強調されている「AI」というもの、いやそもそも「機械」というものの、限界の方こそを厳しく見つめている。それは機械を作っている人間についての、現代的で、正確な理解から可能になるものだと私は考えている。人間と機械との関係を論じた、以下の引用を取り上げよう。長い引用になるが、この箇所は本当に分かりやすく書かれているため、すらすらと読めてしまうはずである。

#### 引用11.【人工知能には感情が再現できていない】

「人工知能、AIなんていうけど、人間の脳をデジタルで再現するのは今のところかなり難しいね。AIの技術が発達しても感情まで再現できるのか、オイラは限りなく疑問に思うんだ。もちろん、AIってのは人間の脳の代替じゃないんだけど、チューリングテストなんてのがあるように、AIの当面の目的は、人間が「人とコンピュータの区別」をつけられなくなることだ。そういう意味なら、AIもかなり人間をだませるようになってきてるんだけど、人間の脳を再現するまでにはなってない。人間は自分たちの脳のことなんて、まだほとんどわかってないんだから当たり前だ。」(38-39頁)

#### 引用12.【脳のシミュレートは神レベルにならねば不可能】

「人間の脳とAIってのは、構造やシステムが根本的に違うんだね。人間の感情っていうのは、指先がちょっと痒いだけで気分が変わったりするくらい微妙なものだ。指先がちょっと何かに触れただけで、パッと新しい考えが頭に浮かんだりするのが人間の脳なんだから、それは人工的にそっくり精緻に再現できるなんてもんじゃない。せいぜい、指先が触れた物質が柔らかいものなのか硬いものなのか、卵かガラスか程度を判断できるだけで、人間の持っている感覚をシミュレーションでなぞらせることは少なくとも今の技術じゃできないんじゃないかって思うね。それができたときにおそらく神の存在、神ってのがどんなものかがわかるんじゃないか。それくらい、期待されている人工知能の技術ってのはすごいことなんだけど、今のAIやChatGPTなんかがそのレベルに到達できているわけじゃない。人間の脳ってのは、宇宙や深海よりもずっとわけのわからない世界だ。自分のことを自分で理解できないってのは一種のパラドックスだと思うけど、喜怒哀楽なんかの原始的な情動反応から始まって、高度な思考の仕組みやヒラメキみたいなシナプスの結びつき、複雑な記憶の回路なんかの脳の機能を人間が理解するのはかなり先、もっと言うと永遠に不可能なんじゃないかってオイラは思ってる。」(39-41頁)

#### 引用13.【人間は既成の仕組みを利用したり消費しているだけでアリ一匹さえ創れていない】

「量子コンピュータが実用化されたとしても、人間の本性は変わらないんだから大きな変化はないだろう。だって、動物でも植物でもなんでも実際、生命自体を人間が創造したことはまだないんだよね。DNAについてわかったとしても、人工的な光合成に成功したわけでもないしね。例えば、我々がいつも食べている米だけど、炭素や水素、窒素なんかの原子や分子の構成はわかったとしても、米を人工的に作り出すことができているわけじゃない。植物は、光合成によって水を分解して酸素を作り出して二酸化炭素をデンプンなんかの有機物にするわけなんだけど、人間は自分でそんなふうには食料を作ったこともないんだよ。人間はそうした仕組みの分析はできるし、植物を利用して農業をすることはできるんだけど、そうした仕組みを作り出したことはない。石油や天然ガスなんかの化石燃料にしても、それを掘り出してただ単に使っているだけで、自分で化石燃料に匹敵するようなエネルギーを作り出してはいない。何ひとつとして人間は新しいものを作り出しちゃいないんだ。人間の科学技術は進歩しているように見えるけど、実際には自然が作り出したり何億年もかけてためてきた資源をただ消費しているだけなんだ。その結果、地球のバランスが壊れて、世界中で異常気象が起きている。」(43-44頁)

「引用11」において北野氏は、機械と人間とが、ときに混同されることはあっても、なお同一とは決して言いえない理由は、機械に人間の「感情」をシミュレートできないからだと言っている。では、人間の感情をシミュレートするためにはどうしたらいいかというと、脳をシミュレートできればいい。しかし、人間は脳なるものをシミュレートできているのかというと、そもそも脳で何が起きているかすら、詳しく分かっていないのだから、できているわけがない。脳はあまりにも複雑な機構を持っているのである。では、人間の脳が無理なら、アリくらいならできているのだろうか。実は、アリもできていない。アリの代わりになれるようなアリロボットはない。では、アリの細胞一個くらいならばできているのだろうか。私は分子生物学に明るくないが、どうやら「細胞膜」を人工的に作るこそが難しいのだが研究中、というような段階らしい。ことほど左様に、「引用11」から「引用13」では、機械が決して人間の代替に、完全にはなり得ないということが理路整然と書かれている。「引用12」において、脳と心の間の関係を決める法則を知ることは、神の叡智にあずかることに等しいと北野氏が喝破する点で、フランスの神父ニコラ・ド・マルブランシュの認識論を想起する読者もいるかもしれない。私は、ここの記述を読んで、小林秀雄が1959年の『文藝春秋』に掲載した「常識」についての文章を想起させられた。それは次のような文章である。

引用14.【常識は機械の限界を既に人に告げている】

「先日も、漫然と教育テレビを眺めていたら、ある先生が、現代生活と電気について講義をしていたが、モートル(Motor)が、筋肉の驚くべき延長をもたらしたが如く、エレクトロニクス(electronics)は、神経の考えられぬ程の拡大をもたらした、と黒板に書いて説明していた。一般人に向っての講義では、そう比喩的に言ってみるのも仕方がないとしても、そういう言い方の影響するところは、大変大きいのではないかと思った。例えば、人間の頭脳に、何百億の細胞があろうが、驚くに当らない。「人工頭脳」の細胞の数は、理論上いくらでも殖やす事が出来る。ただ、そう無闇に多くのデータを「人工頭脳」に記憶させるには、機構を無闇に大きくしなければならず、そんなに金のかかる機械では実用に向かないだけの話だ。こういう説明の仕方は、これを聞いている人々を、「人工頭脳」を考え出したのは人間頭脳だが、「人工頭脳」は何一つ考え出しはしない、という決定的な事実に対し、知らず識らず鈍感にしてう。[中略]。機械は、人間が何億年もかかる計算を一日でやるだろうが、その計算とは反覆運動に相違ないから、計算のうちに、ほんの少しでも、あれかこれかを判断し選択しなければならぬ要素が介入して来れば、機械は為すところを知るまい。これは常識である。常識は、計算することと考えることを混同してはいない」(小林秀雄著「常識」新潮社刊『小林秀雄全集』第23集より)

実は、北野氏も小林と軌を一にするかのように、「常識」の重要性をこの本の中で強調していることが興味深い。小林が哲学的反省の末に到達した常識の動態の再評価に、北野氏も到達したのではないかと思わせる箇所を、この節の最後に引用しておく。

引用15.【人を笑わせるために常識は原理的に必要】

「よく芸人が非常識なことを言ったりやったりしたとき、芸人なんだからしょうがない、なんて擁護にもなんないことでまとめようとするヤツがいる。だけど、お笑い芸人に限っていえば、常識がない芸人は大成しないんだよ。なぜなら、笑いつてのは、常識的な日常の中に潜んでいるもんだし、常識がないと笑いとヤバい発言とのギリギリの際がわからないからだ。」(142頁)

## 第四節：夢について

北野氏と「夢」といえば、1986年の楽曲「浅草キッド」の最後の一節、すなわち「夢はすてたと言わないで 他に道なき2人なのに」という一行を、素晴らしいメロディとともに想起する方も多いただろう。しかし、どういうわけか、この本のタイトルは、『人生に期待するな』であり、「夢」というものについて、一見すると北野氏はこの本の中で否定的な態度をとっているように見える。つまり、端的に言うと、「夢は捨てる」と言っているように聞こえるのである。実際、以下の引用を見てほしい。

引用.16【地に足がついた本当の自分の輪郭を学習者に確認させていくのが本来の教育】

「じゃんじゃん消費して、どんどん経済成長して、みんなで豊かになろうっていう高度経済成長期の幸福論は、バブル崩壊だの、大災害だの、いろんなことがあって、いったんは否定されたはずなのだが、今も脈々と生きている。夢を持ってというのも、そういう話だ。とにかく成功して、金持ちになって、贅沢できるようになるっていうのが、普通の大人が普通の子どもに教えている夢の中身だ。夢を持ってっていうのは、前向きに生きろってことなんだろう。夢がかなうと信じて、一生懸命に勉強したり、スポーツに打ち込めってことだ。子どもの鼻先に夢という名のニンジンぶら下げているわけだ。だけど、夢を持てば、誰もが一流スポーツ選手になったり、大金持ちになれるわけじゃない。努力すれば、きっとなんとかなるって、そんなわけないだろう。一生懸命やってもうまくいくとは限らなくて、どうにもならないこともある。それが普通で当たり前だってことを教えるのが教育だろう。」(225-226頁)

以下では、この「夢」というものについての両義的態度がどのように北野氏の中で両立しているのか、という問いについて考えてみたい。なぜ、北野氏は「夢は捨てる」とも受け取られかねない発言をするのだろうか。それは、おそらくその「夢」が、あくまでも「外発的な夢」だからである。否、もっと正確に言えば、「外発的な夢」などというものはほんらい「夢」の名に値しない「紛い物」なのであるから、「夢の真贋を見分けよ、真の夢に向かうためにも贋の夢を捨てよ」と北野氏は言いたいのであろう。自分の夢だと思い込まされている他人の夢を捨てよ、と北野氏は言っているように見える。実際、引用10において、「そもそも夢を抱けとか成功しろとか金持ちになれなんて尻を叩く連中が、なんでそんなことを言うのかと考えると、夢を抱いたり金持ちになろうとあがいたりするような人間がたくさんいないと経済が回らないからなんじゃないだろうか」と北野氏は述べていたことを思い出す必要がある。これを踏まえると、北野氏が、本当は、人が現在に畳み込まれた既往性という地面を蹴りながら、未来の夢を掴もうとすること自体を肯定していることがよくわかってくる。次を見てほしい。

引用17.【未来に掲げさせられた贋の夢が否定されることで現在の真の夢だけがよく見えてくる】

「本当にやりたいことがあって、頑張っているヤツを否定するつもりはない。成功しようがしまいが、それがそいつのやりたいことであれば、思う存分にやればいい。だいたいそういう人間は、夢を持ってなんて言われなくてもやり遂げる。人が本当に生きられるのは、今という時間しかない。昔は夢なんかより、今を大事に生きることを教えるほうが先だったのだ。まだ遊びたい盛りの子どもを塾に通わせて、受験勉強ばかりさせるから、大学に合格したとたん何をするかわからなくなる。夢なんてかなえなくても、この世に生まれて、生きて、死んでいくだけで、人生は大成功だ。オイラは心の底からそう思っている。」(228頁-229頁)

「人生に期待」なんかしなくても、目の前の人生そのものが、実は既に豊かであり、人にはしばしばそれが見えていないのだ。「虚構された未来の人生に期待するほど、現在の人生を我々はよく味わって見たのか」、と北野氏は問いかけているように見える。実際、ものごとにはタイムリミットがあり、未来に先送りすると未来ではもっと難しくなることも多い。そのことを北野氏は面白おかしく次のように、表現している。

引用18.【なぜ現在に目を向けることが未来を夢想することより重要なのか】

「よく「定年後に備えて趣味を持て」なんて言うよな。だけど、あれは嘘なんだよ。その趣味がいかにおもしろいかということを知るには、さすがに定年後だと遅すぎる。だって、本当の趣味というのは、会社勤めなんかをしている間に「親が急病で」なんて会社に嘘をついてまでしてゴルフや釣りなんかをすることなんだから。そうまでしてやるのが趣味なんで、定年後に何か趣味でも始めようかといったって絶対に続かないよ。親族の葬式だって嘘を言って仕事をサボって陶芸をして、できた焼き物を香典返しだって上司に渡すくらいずうずうしいことをしないと趣味なんて見つからないんだよ。」(127-128頁)

人にもたされる外発的な夢というものを、なぜ北野氏はここまで警戒するのだろうか。それには以下のような論理があるのではないかと思われる。一般に、現代社会において、人は成長過程で「夢を持て」と言われ続ける。そうやって大人になる。それゆえ、胸を張って人に語れる夢がないことに苦しんだ者は、咄嗟に、出来合いの夢をどこか他所からもらってきて、それが自分の夢であると承認し、「これが私の夢でござい！」と嘯く。立派ではあるが、現在の自分からは離反した夢を捏造するのである。そこで北野氏は、たとえそのことが残酷に映ろうとも、現在の自己への配慮から始めよ、と繰り返す。そうでなければ、世界と私は繫留点を失ってしまうからである。つまり、私が見失われると、世界に対しての関心も見失われ、成功を手にしてもそれが自分にとって本当に嬉しいのかどうかさえ、わからなくなってしまうからである。**失敗することよりも、成功を手に行っているのに、その成功が本来の自分からするとどうでもいいことだから、その成功にリアリティがなくなることこそが、本当の不幸ではないだろうか。**というのも、好きなことを頑張った先での失敗は、自己をより確実なものとする点で十分納得が可能であろう。しかし、好きでもないことをやり、好きでもないのだからおそらく成功しないだろうが、万が一、そのまま成功してしまって、それをやめられなくなることは納得が難しい。**失敗における自己把握より成功における自己喪失のほうがよほど不幸である。**成功して何かを手に入れても、それが自分の本当に欲しかったものなのかどうか、分からないから嬉しくもない。成功が嬉しくないのと同様、失敗も悲しくない(むしろ失敗は、浮華を去って摯実に就く、つまり真の自己に復帰する契機とはなりえるから、このような状態における唯一の喜びですらあるのかもしれない)。北野氏は、このような自己疎外状態、無感動状態にならないために、自己への配慮を本書の中で繰り返し促す。

引用19.【夢より足元をみよ】

「夢を追いかけて、しっかり足元を見ろってことなんだろうね。」(77頁)

引用20.【人に夢を見させるのと足元を確認させるのとでは、どちらがより残酷なのか】

「できないものはできない、無理なものはどうやったって無理なんだけど、そうしたことをちゃんと言ってやる大人がいないんだから、残酷といえば残酷なことだ。」(19-20頁)

また、北野氏は、子どもにまずは自己の現実的輪郭を直視させるべきだという主張について、ふたつのメリットを挙げて正当化をしていると考えられる。ひとつめが、「障害を知ることによって創造性が涵養される」という点で、ふたつめが、「夢の自分になってからではなく、そのままの自分で自分を肯定できる社会のほうが安心できる」という点である。どちらも一定の説得力があると考えるので、それぞれ引用しておく。

引用21.【なぜ親は子どもに夢を見させるのではなく現実を直視させてもよいのか】

「これは一般論なんだけど、人間の知恵や創造力ってのは、壁や障害があつてこそ豊かに発揮されるんだろうね。分厚い壁が、その子の目の前にあれば、ほっておいてもその壁をなんとかしよう、その障害から自由になろうともがくもんだ。壁をぶち壊そうとするヤツもいれば、壁の下に穴を掘ろうとするヤツもいるだろう。壁の内側に誰も気づかなかつた自由を見つけるヤツもいるだろう。知恵や創造力を使って壁や障害を乗り越えるところに、ある種の喜びがあるんじゃないか。」(113頁-114頁)

引用22.【誇るものなんてなくても安心できる社会の方が生きやすい】

「昔は、何も誇るものなんてなくていいって言われたもんだ。人さまに迷惑かけず、ただそのまま生きていけばいいなんてことが世の中のルールだったのに、他人と差別化して何かで一番になりなさい、なんて嫌な競争社会になっちゃった。」(75頁)

北野氏は、煌びやかな夢の世界に、経済の成長期が終わってなお期待することで、目の前の、じゅうぶん豊かになつたはずの現実を味わう術を忘れてしまったということと、現代社会のさまざまな問題の根幹を見ている。では、その目の前の現実を味わう術とは、具体的にはどのような技術のことなのだろうか。北野氏が挙げている具体例と思われる部分を紹介しよう。

引用23.【他人の話が面白くないのは自分に技術がないから】

「年齢が違い過ぎるから話が合わないなんてよく言うけど、それも話が合わないんじゃなくて、話を引き出せない自分を恥ずかしく思うべきだ。年寄りとお茶を飲んでいて、「おばあちゃん、このお茶はなんて名前？」って聞けば何かしら教えてくれる。同じように、会話をしようとか、相手に対する好奇心があれば、すぐくためになる話を聞けることだってある。聞かれた相手は気持ちいいし、こっちはそれまで知らなかったことを知ることができる。これは相手が小学生だって同じだ。料理人に会ったら料理のこと、運転手に会ったら車のこと、坊さんに会ったらあの世のこと、何でも知ったかぶりせずに、素直な気持ちで聞いてみるといいね。そうすれば自分の世界が広がるし、その場も楽しくなる。たとえ知っていたとしても、ちゃんと聞くって態度が大切なんだよ。」(90頁-91頁)

実は、相手がおばあちゃんであれ、小学生であれ、世間話を本気で楽しもうと思えば、組み尽くし得ない新たな側面が相手の中に見えてくることがある。見慣れた相手との会話でも、話しかけ方次第で、日常はいくらでも楽しめるのである。

## 第五節：書評のおわりに

この書評で私は、この本でどういうことが言われているのか、その一部を、よくほぐして、紹介してきたつもりである。北野氏は自分の思索をこれからも更新し、深化させていくに違いない。本人もそのように述べている。

引用24.【「あいつは変なヤツで何考えてるのかわかんねえ」と常に言われることが必要】

「ぬらりひょんみたいに捉えどころがないのがいいんで、そいつの芸のキモみたいなもんがみんなにバレちゃったらおしまいなんだよ。あいつは変なヤツで何考えてるのかわかんねえ、なんて常に言われてなきゃならなくて、あいつの芸はあだね、なんて解説されちゃったらもうその芸に魅力はない。生物の進化論みたいなもんで、遺伝子を組み換えて走り続けてないとダメなんだ。正体をつかませないようにして、理解したと思った瞬間には全く違う芸を見せていかなきゃ。」(138-139頁)

ここは、北野氏が、私のような人間が書く、安易な理解を警戒している箇所であるとも読み取れる。とはいえ、私はこの書評で、北野氏が金儲け主義(第二節)、機械(第三節)、夢(第四節)について論じた箇所を分析し、それらの箇所は誰にでもわかる平易な言葉で、普遍的な問いに対する一定の回答を与えていることを示してきた。冒頭にも述べた通り、これこそ安易な理解なのかもしれない。しかしそれでも、この本の魅力の一片はここまで読んでくれた方に伝えられたと信じている。

なお、最後に記しておきたい。実はこの本のなかでは、私が前節までで扱ったテーマ以外にも様々なテーマが論じられている。いくつか短文を引用しておくので、続きはぜひ自分の目で確かめていただきたい。

引用25.【神が人間を作ったのではなく人間が神を作った】

「神ってのは、人間が作り出したもんだから人間にとって都合のいい存在で、説明できない現象とか理解できない幸運や不幸みたいなものを納得させるためのツールなんだろうね。」(205頁)

引用26.【死にも適応的機能がある】

「死ななかつたら人間は進歩しないだろうし、子孫を残そうなんて欲望もなくなるだろうから遺伝子が混ざらなくなって進化もしなくなるだろう。」(188頁)

引用27.【技能実習生問題】

「前から外国人技能実習生制度にはいろいろ問題があった。」(120頁)

上から順に、神も、死も、移民も、すべて現代でこそ、なおさら重要になってきている事柄であり、考えておいた方がいい、というより、なんらかの自分なりの考えを持たずして、まともに生きていくことができないような事柄である。北野氏と同じ考えを持つべきだという話では全然ない。ひとりの思索家と向き合い、あなたとの距離を測り、あなたとの違いに驚いてほしいのである。それでは、ここまでこの書評を読んでくださり、本当にありがとうございました。

田中 恭平